天理スポーツ シンポジウム②

おやさと研究所
天理スポーツ・オリンピック研究室
難波　真理　*Mari Namba*

３月 12 日に行われた「天理スポーツシンポジウム 2011　未来を創る！～天理 障害者スポーツ～」の報告第２回目は、基調講演の続きを掲載する。矢部京之助氏が作成した数多くのスライドを使い発表したが、今回は当時使用した数枚のスライドも掲載する。

＊　　＊　　＊

障害者スポーツは医療の一環として始まり、競技スポーツとしても目覚ましい発展をしめしている。主な国際組織・国際障害者別競技団体や国際パラリンピック委員会は、多くの統廃合を経て増加の傾向にある。わが国でも以前より競技大会は増えてきたが、障害者スポーツの生みの親といわれる中村裕博士の望んでいた医療の果たす役割を念頭に置いた障害者スポーツの発展を忘れてはならない。つまり障害者スポーツは競技として発展するだけでなく、医療の部分や楽しみの部分としても発展しなければならないのではないかという問題がある。しかし、学校では体育の授業で障害を持った児童生徒に対して運動する機会を与えることが非常に少ないというのが現実である。なぜこのようなことが起こるかについて矢部氏は、障害を持った人に対する健常者の理解が低いからという思いを抱いている。体育は、からだを動かすことに基本がある。しかしながら体育の教員が障害のある児童生徒に運動を与えなくなってしまった。障害を持った人は運動しなくていいという思い違いや、運動をさせるのが怖いなど、障害に対する正しい理解ができてないためである。一方では、障害を持っている人自身が運動することの楽しさや必要性を教わらなかったために、スポーツをすることは特別なことと思っていたが、いざスポーツに接すると、医療としての役割よりも競技志向に傾くきっかけになったものと推察される。

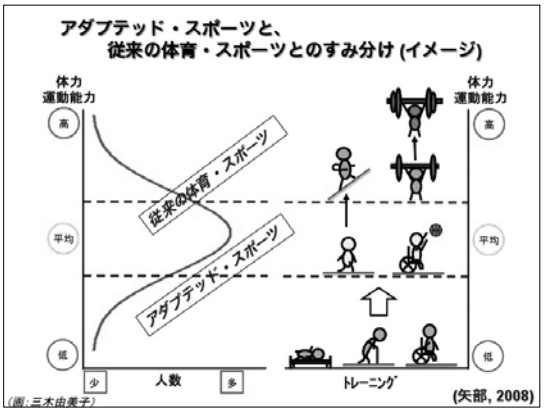
では、わが国における障害のある人の体育・スポーツの歩みはどのようになっているか。そこには２つの大きな要因がある。１つはパラリンピックムーブメント、もう１つは特別支援学校の義務化である。さらに３つのエポックがある。まず、1964 年に行われた東京パラリンピックでは身体障害者スポーツ振興の原動力となった。次に 1979 年に設置された特別支援学校の義務教育化である。これにより心身に障害のある児童生徒の体育・スポーツ参加の契機となった。３つめに 1998 年に開催された長野冬季パラリンピックである。これを契機に障害者スポーツの範疇は福祉から競技へ変化し始めた。また、テレビや新聞などで多く取り上げられたことから障害者スポーツは広く認知されるようになった。この結果、課題も現れるようになり、障害者スポーツが知的・精神障害者スポーツよりも身体障害者スポーツのほうが広く知られるようになったこと、指導者の養成・職域の拡大をはかることなどが明らかになってきた。

では、講演の初めに用いられたアダプテッド・スポーツという言葉を紹介する。これは障害のある人の体育・スポーツに関して使われるようになってきた用語である（スライド１）。英語圏では Adapted Physical Education とされ、1970 年代から Education は Activity へ変化した。言葉の意味合いはルールや用具を障害の種類・程度に合わせた（Adapt させた）身体活動である。昨今では、国際的に包括的な言葉の「障害者」を使わない傾向にあり、これに対応する用語である。具体的には、障害者や高齢者などの身体能力の低い人たちを対象としたスポーツ（主体的な身体活動）をアダプテッド・スポーツ→“その人に合ったスポーツ”と呼称する提言である。では、アダプテッド・スポーツとは何か。2005 年には日本体育学会に「アダプテッド・スポーツ科学専門分科会」が設置された。アダプテッド・スポーツの定義は「障害者や高齢者などの身体能力の低い人を対象としたスポーツ」であり、目的は「身体活動を通して健康と体力の維持増進を図ること」である。差し迫って大切なテーマは「生活の質の向上に直結した体力トレーニング」である。ここでよく聞かれる障害者と高齢者の相違点であるが、体力科学から見ると、障害者は部分的な機能低下であり、障害の部分を除くと健常者と変わらない。対して高齢者は全体的な機能低下であって、加齢に伴い、全身の機能が一様に低下した状態である。これにより、指導法に違いが現れるのである。

スライド１

障害児・者におけるアダプテッド・スポーツの対象者は、『障害者白書 2010』によると身体障害児・者では 366 万人、知的、精神障害者を合わせると 744 万人で、人口比の約６％に及ぶ。このことからアダプテッド・スポーツの対象は意外と身近な存在であることがわかる。高齢者における対象者を見ると、身体障害者の年齢比率は加齢とともに増加傾向にあり、70 歳以上が約 46％を占め、しかも 65 歳以上の身障者の２/３は高齢者である（『障害者白書 2002』）。また、『障害者白書 2008』によると国民全体の 70 歳以上の 10 人に１人が身体障害者であることがわかる。

アダプテッド・スポーツと従来の体育・スポーツとのすみ分けイメージを図に示した。従来の体育・スポーツの領域は平均より高い体力・運動能力を持った人を対象とし、アダプテッド・スポーツは平均より低い体力・運動能力を持つ人を対象として行われる。（続く）



スライド２